

### 第3回（仮称）新三宮図書館整備検討会 議事録

日 時：平成30年9月12日（水） 11時～13時

場 所：神戸市立中央図書館2号館4階 研究室(1)(2)

出席者：（委員）中井会長、小林委員、村上委員、吉富委員

（事務局）中央図書館長、総務課長、総務課担当課長、総務課担当係長3名  
都心三宮再整備課担当課長、担当係長

傍聴者：1名

- 1 開会、挨拶
- 2 委員紹介
- 3 報告

雲井通5丁目地区再整備にかかる事業協力者の決定について、住宅都市局より、  
配付の参考資料に基づく説明

会長：ご質問、ご意見はあるか。

委員：図書館自体の設計は誰がするのか。

事務局：これ全体が一体の建物として、これから事業計画を作る。簡単な基本的な設計からスタートするが、今回選ばれた事業協力者に行ってもらうことになる。その材料として中に入っていていただく方々に、こんな仕様にしてほしいというご要望を聞きながら、事業計画を作成していくことになる。

委員：そういう形で設計されて、あとの運用が行政に戻ってくるケースは結構多いのか。

会長：今回は再開発事業であるので、運営はまた別の話だ。PFIやPPPといった話ではない。普通の再開発事業なので、この方たちが計画して建てて、そこを市が買うか借りるかだろう。

事務局：その辺りもこれからの話になる。

委員：そのスキームは決まっていないのか。

会長：これからだろう。基本的には運営は直営、いや、図書館は（現状同様）指定管理者と今は考えられていると思う。

委員：前回いろいろ話した中で、議事録を見ながら抜けていたと思うことがあったが、今それを言ってもよいか。それとも建物に関する、内容に関することは後の方が良いか。

会長：内容については後でもう一度やる。この報告に関することは今言っていただければ。

委員：坂さんがされるということで、いろいろな人の動きや流れがわかっていると思う。たかとりコミュニティセンターの中で仮設のシェルターを建てるところから神戸と関わられて、建て直す時もイメージやいろいろなことを話しながらい作り上げた。その後彼が作ったペーパードームを台湾に移築するプロジェクトと一緒にいった。いろんなことをよく知っておられる、いい方になってよかった。では

この先は内容のところで述べる。

委員：図書館は知のリビングのところに相当するのか。そこの一部分、スカイライブラリーというすごい写真が載っているが、この緑のある階あたりに知のリビングがあり、この全部ではなく一部分が図書館ということか。知のリビングには他にどんなものがあるのか。

事務局：この（参考資料の）真ん中の「知のリビング」と書いた図の横に捕捉で説明を載せているが、ちょうどビルのタワー部分と下の基壇部分の間あたりをイメージしており、スカイライブラリー、屋上にライブラリーがあつたらいいだろうということと、屋上庭園と結びついている形で、それにビジネス支援機能ということで、これから起業しようという方が使用したり、それをサポートするような取り組みを三菱地所株式会社が東京の方でされており、そういった機能を近くに入れるということで、図書館等と相性のいいものになっていくのではないかと。また、あわせてホテルラウンジでの会合であつたり企業の展示会であつたり、そういうことのできるスペースを設けることで、まさに知の集まる場所ということで「知のリビング」として盛り上がっていくだろう。また加えて、緑化空間も利用できるという提案になっている。

ただこれは決定ではなく、あくまでご提案いただいた内容をもとに、これから地権者等の皆様のご意向などを伺いながら、具体化していくことになる。三宮も駅前あたりはオフィスも不足している状況であり、そんななかでしっかりとそういった機能を提供するとともに、神戸らしいシンボリックなデザイン、さらには付加価値を高める「知のリビング」みたいな機能が新たな魅力になるのではないかとということで、選ばれたひとつの理由になっている。

委員：三宮図書館もこれまでビジネス支援を頑張ってきた館であるので、その辺りも関係するだろうか。

会長：このように計画される事業協力者が決まったので、これから議論が本格化するだろう。今私たちが協議している内容を、事業提案者である彼らにちゃんと伝えていただき、それらを踏まえてしっかりコンタクトを取って、計画を進めてもらえればと思う。現在の印象としては上の方はどちらかというところとすっきりと大人っぽい雰囲気があるが、下はバスターミナルなので結構賑やかにいろいろやってもいいのではないかと。私たちの話した中でも、意外と子供たちも来るのではないかとということがあつたので、子供はスカイライブラリーを使うなということではなく、いろんな人が使える、使うということ踏まえ、空間の質としては上品な大人の雰囲気を出してもらってよいと思うが、きちんとゾーニングをして、使う場所を分けていただけたらと思う。図書館と市の方で協議をする中で、この点はきちんと伝えてもらいたい。建物の全体に対して図書館の占める割合は微々たるものだが、意外と図書館は顔になる施設である。そういう意味で、言うべき時は言うという風にやっていただければと思う。

(事業協力者の応募は) 二社しか出なかったのか。大きすぎて実際にはできるところがこの二社くらいしかなかったということか。もっと出るかと思ったが、本命の二社ということだろうか。これから協議が始まると思うので、我々の意見を上手に伝えていっていただきたい。

#### 4 協議

会長：前回までの協議を振り返り、抜けていることや書き加えたいことについて、ご意見、ご協議をお願いしたい。

委員：最近あまりに災害が頻発しているので、防災については建物もしっかり考えるだろうが、もう少し対応、仕組みを入れ込んだものが必要なのではと思う。共同通信の取材で、北海道の地震でも外国人観光客が動けなくてどうしようかということになっているのに、その仕組みができていないという話が出ていた。観光を柱にしているのであれば、外国からの観光客に限らず、観光で来られている方についても、災害時に何か積極的に発信する仕組みの中に入れた方がよいだろう。FM わいわいというコミュニティラジオにずっと携わってきて、今インターネット放送に切り替えているが、そのラジオ局と神戸市は災害時の協定を結んでいる。長田区とも結んでいる。長田区とは、災害が起きたときは、長田区から割り込んで放送ができるということにしており、そこにそういうスペースがある。神戸市の方は、災害が起きたらすぐに総務省に（希望し）、神戸市が立ち上げる災害ラジオの放送を FM わいわいがするという協定である。それはもちろん多言語で行う。FM わいわいというラジオ局がある長田区では普段からインターネット放送しているので、そこから災害情報を流すことはできるが、そういう時の情報は行政にある。神戸市の危機管理室などが防災無線を使うのだが、その機能としてこの三宮の中心のところに、今回はここまで言わなかったが、ラジオの小さなブースがあると、そこから割り込み放送ができる。ラジオは大きなお金をかけなくても、スペースと今はもう簡単な送信機があればできる。普段、災害時でないときは、静かな音楽を流したり、昼休みだけ「こんな本がありますよ」と紹介をしたり、ボランティアの方にもラジオとして少し読み聞かせをしてもらったりなど、内容についてはいろいろアイデアがあるだろう。普段ずっとそこで何かしていなくても、そういうブースがあり、時間ごとに活用できることや、交流スペースやイベントスペースにありながら災害時は災害情報を発信する大切な場所となり、基地として使えるよう考えておくと、とても大切な機能になるのではないかとつくづく思った。本当に災害がこんなに頻発していると、逆にたくさん使われることになるかもしれない。そこにバスターミナルがあるということは交通情報に関しても、情報が入ってくる拠点になるのではないか。まずはそれがそんなにお金がかかるものではないことはよく知っているので、イメージしていただけると思う。小さなスペースと本当に簡単な機材を用意すれば、イベントの時にも、それは外に発信するのではなく館内放送のような形で、今こんなイベントしているというような実況中継ができるかもしれない。いろんなアイデアでツール

として使うことが可能ではないかと思う。そんなことが普段からあれば、多言語での情報にもなりやすい。場所だけでなく機能として人為的なことができるのではないかと付け加えたく、意見として話をさせていただいた。

委員：イメージが湧いていないのだが、言語ということでは図書館と結びつくが、ラジオのブースというのは図書館にあるのが一番いいのだろうか。災害であれば図書館よりも危機管理室もあるだろう。そのあたりで少し混乱した。

委員：一石二鳥を考えている。災害のためだけに作るのではなく、図書館の中にそういうツールがあるということだ。海外では本当に図書館ラジオもあり、いろいろ活用されている。情報を発信するという意味では図書館にはいろんな情報があるし、観光の情報を提供するというのも話に出ているので、いろんな情報を発信するツールとしてあれば、災害時もすごく使えるだろう。バスターミナルで交通の拠点にもなるということで、それらも全部結びつくことができるので、ここにあったらよいのではと考えた。危機管理室の持つ防災無線として発信するということはもちろんあるが、それは普段全然使われていないので、それを聞く人があまりいない。図書館でイベントと合わせたら、こういうものが図書館にはあるんだなと知ってもらえ、災害ラジオとして立ち上げてそこから本当に電波を発信したときに、ああ、あそこから放送してるんだというイメージが受け手にも湧きやすいので聞きやすいということがある。普段は別にラジオの発信をしているのではなく、図書館ラジオとして館内放送の、少しコンテンツが詰まったようなものというイメージである。普段は、たとえばFMわいわいと組んで、ある時間帯だけ放送すればインターネットラジオとして世界中に放送できるので、図書館の内容を世界中に発信することも可能になる。そういうツールとして置いておくといろんな可能性を広げると思う。そして災害時にも役立つ。学校の中に放送部があるという感じに近い。放送部が災害時は（機材等を）外に出したり、イベントの時は外に机を出したりする、そんなイメージである。

委員：そういうものがあればいろんなシチュエーションで使えるということか。

委員：そうだ。

事務局：バスターミナルビルの全体の中でも防災のことは考えられており、『三宮駅周辺地域都市再生安全確保計画』を踏まえ、多言語対応やピクトグラム等、わかりやすい避難場所への案内誘導など災害時における帰宅困難者の安全の確保を図るため必要な対策、防災力強化を図るための非常用発電機等の整備など、事業継続性の確保、緊急避難場所・避難所として必要な機能の導入について検討を行うものとする」と書いてある（「新たな中・長距離バスターミナルの整備に向けた雲井通5・6丁目再整備基本計画」）ので、ビル全体としてもお考えになるのだろう。先ほどの日常的情報発信のツールとしては、おもしろそうだと思うが、私自身ラジオ放送にあまり詳しくないので、それが本当に簡単にできるのか、お金はどのくらいなのだろうなど、そんなことを考える。

委員：小さなスペースなので、お金はあまりかからない。ずっと放送する必要もない。外向けに電波を発信するわけではないので、館内放送に毛が生えた程度のコンテンツ、住民の人や図書館ボランティアの人にたとえば今月の本の紹介してもらおうなど（考えられる）。いろんなアイデアやコンテンツが、ツールがあるだけで集まってくるし、そういうことに関わりたいという人が来るだろう。今それを誰がするとか何をするというよりは、機能として置いておくと、アイデアは後からいろいろ（出るだろう）。人もそれがあることによって集まってくる。たかとりコミュニティセンターの活動の中でも、放送のスタジオがあることで、いろんな人たちを呼び込んだり発信したり街に出かけて行ったりというツールになっている。使えるツールだと思う。ラジオ放送というどうしてもマスメディアを思い浮かべ、プログラムがあって、それに従って放送しなければならないと考えてしまうかもしれないが、要するにそういうコミュニティがあってそんな使い方をするのは、90パーセント活動で、必要な時に10パーセント放送するという感じだ。私たちが全くの素人が始めたような状態である。プロが来る必要はなく、むしろ住民や図書館に集う人が使う。特に図書館ボランティアに関わってらっしゃる方たちは、いろいろな知識や情報をお持ちだろう。そういうところが核となるというイメージだ。

会長：公共図書館の中にそういうラジオブースがあるというのは知らないが、大阪の森ノ宮キューズモールにあるまちライブラリー、マイクロライブラリーと言われている本を持ち寄って会員制で運営しているところだが、そこに、喫茶コーナーとラジオのFM放送局がある。行ってみると、がやがやしたところで喋っているの、誰が何を喋っているのかと結構驚いた。公共の図書館では静かな雰囲気、となるので、なかなかそういうもののイメージをつかみにくいかもしれない。図書館の中にあつた方がよいのか、あるいは少しパブリックなゾーンで、皆が賑やかにしているところに置くなどあつてもよいと思う。この森ノ宮のキューズモールのようなイメージだろうか。

委員：福島では避難所である体育館でも放送をした。放送をすると皆が寄ってきて、音楽をかけるとそれで少し癒されたり、プログラムされたカラオケのように本当に皆自分の体験をしゃべりたがったりする。おっしゃるように公共の場で使える道具というようなイメージである。海外では図書館の中に図書館ラジオがあり、ヨーロッパにもあり、さらに言うと車で移動ラジオなんかもある。そこで降りてインタビューして発信するなど。文化についていえば、大きな権益放送ではもちろんない。災害ラジオになったときは災害ラジオの電波が与えられるが、それ以外、ミニFMという半径100メートルまでのFM局であれば認可はいらぬ。自由に出せる。本当に館内放送の感じで放送ができるので、もし避難所の機能をここに考えられるのであれば、避難している人のための情報も発信できる。災害ラジオということで立ち上げた場合は、そのような時は多言語でも放送するので、長田で放送したものを流すということもできる。そこにいなくてもあとから流すこともできる。ここでの放送がまた

逆に災害ラジオとして市内や、インターネットを通じて流されることもあり得る。エリアも内容もその時や状況によっていろいろ考えることができる。静かなところで放送するなどということは逆にない。マスメディアで、ブースで、静かにして、という放送ではなく、私たちが阪神淡路大震災のあとはトンカントンカン言っている中で放送していた。要するに伝わることと、発信する側に住民が関わること。本当に使う“道具”なので、もしわかりにくければ、それについての説明が必要であるならば、また説明はする。

会長：今のお話のようなこと、災害時も活用できる放送ブースというものを、どちらかといえば静かなところではなく、賑やかなゾーンに設けられるのではないかということ。防災のことで言えば、東日本大震災の時に、岩手県立図書館は盛岡駅前のアイーナ（いわて県民情報交流センター）という複合施設の中にあるのだが、図書館の中に避難していた人たちを出した後に、JR が盛岡駅の構内に人を立ち入らせなかったために、結局また何千人という人が戻ってきて、アイーナの中が避難所になった。基本的に避難所というのは重要度係数というのがあり、建物をもともと頑丈に造らなければならない。（アイーナは）避難所には多分なっていなかったと思われるが、そんなことは言っていられないので、図書館の中ではなく、アトリウムというか階段というか、パブリックな共用部の廊下などで（避難者の）皆さんが過ごされていた。そういう時に、この前の北海道の地震でもそうだったと思うが、我々は知ることができても、中にいる当事者には全く情報が入ってこない。岩手県立図書館は指定管理者だが、直営の職員もいた。直営の職員は災害対応に行き、指定管理の人たちは建物の管理なので、逆に図書館のサービスができたという。そこで何をしたかという、館内に避難してきた人たちへの情報提供として、新聞、雑誌が入ってきたらまずお見せするということから始めた。それは紙媒体であり、（図書館には他にも）音声であり、いろんなものがあるので、災害の拠点になるのかはわからないが、情報提供をするというのは非常に大切なことかと思う。災害時にはどういうやり方があるのか、閉めてしまうこともあるかもしれないが、基本的にはこの施設が避難施設になる、非難してくる人がいる可能性はある。その時に特に情報提供を頑張るというあり方はあるかと思う。備蓄などは今後建物全体で考えられると思う。先日地震の前に帯広の図書館に行ったが、そこには備蓄倉庫があった。そういったものもやるということ。メインにはならないだろうが、防災対策として書いておくことはある得る。抜けがないようにという意味で。

そのほか何かお気づきの点はあるか。

委員：子供が小学校6年生なのだが、通っているところは図書館が充実していないらしく、中学校に行ってやりたいことが図書館に行くことだと目を輝かせて言う。図書館というのはまだまだ、その空間が魅力であるようだ。これまでの議事録を拝見し、今日出席するまでは、三宮という場所柄、ビジネス支援というのは結構大切なのだなと思っていた。この提案書などによると、この建物にはホテルも出来、オフィスか

らコワーキングスペースまで備えるのだから、三菱地所が気持ちを込めて、知の拠点のようにしていくのだという印象を強く持った。知の拠点はよいのだが、先ほどまさに会長がおっしゃったように、セグメンテーションされた、こういう人に来てほしいというのが、上の方のフロアには結構はっきり感じられる。ナレッジキャピタルのようなイメージがにじみ出ている。だからこそ図書館はなおさら、セグメンテーションされていない方々、要するに誰でもが利用できるというところを強く、この検討会からは伝えた方がよいのではないか。誰もがアクセスできる場所がそこにあるということは、上の方で知的なことを一生懸命される方にとっても本当はプラスなはずで、知的な仕事をしている人ばかりが集まっている場所では、彼らの生産性も決して上がらないものだ。いろんな人たちがアクセスしていて、いろんな社会課題も見えるようなところがパブリックなスペースとして近接してあることの方が、このコワーキングスペースやオフィスなどは賃料も非常に高いと思われるが、こういうところで働く方々にとってもむしろ良い。そういうことこそがこれからの社会には必要な知のあり方だというように言った方がよいと強く思う。自分が体験した場所のことをひとつ報告すると、ロンドンにアイデアストア・ホワイトチャペルというところがあり、アイデアストアというのはいくつもあるのだが、ここはバングラデシュ系の人たちが多く住んでいるエリアである。ロンドンの中で少し東の方であり、その地域ではそもそも英語を読めない人が多く、だからこそそういう方々が英語を学び、社会を使いこなせるようになる窓口として図書館が逆に重要だった。図書館の利用率としては低かったエリアだが、そこは設えからしてもとても入りやすく、中でいろんな無料の語学教室であるなど、正確な数字は覚えていないが、図書館の利用率が10パーセント程度だったのが、70パーセントくらいまで上がった、というようなことを見てきた。同じようなことを違う角度から言っているだけだが、この場所はもともと神戸の中でも大分、いい意味でこちゃこちゃしていたところで、その地域の匂いが全く以て消えてしまうのは喜ばしいことなのかもしれないが、こちゃこちゃしていたことの持ついいところ、そういうムードがちゃんと図書館の中に残っていると、どんな方でもアクセスしやすい場所になるのではないか。さらにもうひとつ追加すると、これまでの議事録にもバスターミナル部分に図書館がはみ出していくことが大切だと書いてあったが、まさにその通りだ。実はもっと駅からアクセスしやすくなるのかと思ったら、垂直移動があるのでそれほどアクセスはよくない。そういう意味でなおさら1階に図書館がはみ出していくことの大切さがある。そこで本の返却や最低限のサービスにはとどまるだろうが、何か上に、誰でもアクセスできる場所があるんだと、多文化がよい意味で混じり合っていくゲートウェイがそこにあるということが分かればよいと思う。

事務局：それはまさに我々も話していた。バスターミナルの、1階のところにライブラリー待合というのがあるのだが、ここがはみ出し部分のゲートウェイなのではという感じがする。図書の自動貸出機があったり、予約図書の受取、返却をしたりとい

たことをここでするようなイメージで書かれているのかと思われる。

委員：大変すばらしい提案だ。繰り返しになるが、おそらくビル全体のムードからしても、下の方がいろんな方の出入りがあり、上に行くほどセレクトティブになっていくような造りになるのだろう。この中層階、基盤部の知のリビングのところにユニバーサルな場所があるというということが1階で表現されていたらいいと思う。

委員：この図を見たとき、このライブラリー待合とは何だろうととても気になった。

事務局：提案書では「週・月替わりでバスがつなぐ各地の本を紹介する旅のライブラリー」「図書館のサテライト機能としてロボット技術を活用した自動貸出返却サービスを提供」書かれている。

会長：部分的に少し本が下りてきていて、選ぶことができるスペースになっているということか。実際にできるかどうかはまだわからないが。しかしせっかくのチャンスではあるので、そういうことは活かしていただきたい。実は前回、各委員からどうしても大切にしたい思いというものをひとつずつお話しいただいたときに、ダイバーシティ、多様性ということが出、私はアクセシビリティとお話した。誰もが来やすいということ、やはり大切にしていきたい。確かに、(図書館のある)階は高くなっていくが、いろんな方々が利用できるように、静かに読みたい人もにぎやかなところでも読める人も思うとおりにできたら良い。今の案では非常にハイソなイメージであるので、子供さんが来て多少騒いでもいいようなスペースも作っていただき、静かに読めるスペースもあればいいと思う。実は大学図書館なんかで調査をさせていただくと、ラーニングコモンズという話しながら勉強するようなスペースがあり、普通はグループで利用するのだが、実はそこでも7割ぐらいの学生は一人で来ている。周りは喋っているのだが、一人で勉強している。開架閲覧室という、広い普通の閲覧室でも7割ぐらいの人が一人で使っている。結局みんな、ひとりで、ざわざわしていようが静かであろうが、場所を選んで使っている。ざわざわしている方が集中できる人もいれば、隣に誰かが頑張っているのを見ながら頑張れる人もいる。そういうのが嫌で、一人の世界に入りたい人もいるので、様々な場所をたくさん用意してあげることが意外と(重要だろう)。滞在型利用ということが今図書館では言われている。滞在型というのは、字面からは滞在時間を長くということイメージするがそうではなく、いろんな使い方をできる場があるということではないかと思っている。今回はそれほど大きくない図書館だが、屋外の空中庭園や他にもいろいろな共用部を使って施設全体の中で運営し、情報提供については図書館がしっかりサポートするというようなことで位置付けていただけると大変良いと思っている。図書館だけしっかりやればいいということではない。これから整備を考えるときにもう少し、私たちのこの議論は図書館だけではなく拡大していつているので、それをそのまま検討していただきたいという気はしている。皆さんの思いが強く、図書館から離れて拡大していつている。しかしこれからの図書館というのはもう少し拡大してもよいのではと私も思っている。図書館は受け皿として守備範囲が広い。



本や資料が、すべて網羅してしまう、スポーツでも例えばサッカーがうまくなるコツというような本があれば、図書館はスポーツも対象にしてしまう。小さいけれどもどんと来いと、広く受けたらよい。受けて、いろんなところに流せばよい。ワンストップサービスではないが、受け口になってくれたらよいと思う。この委員会は議論を集約するのではなく拡散していったらよいと思うので、お気づきの点はどんどんお話しただければと思う。

委員：これまで新しい、今までにないところを議論してきたが、実は今現在利用している人からは、住民のことを忘れないでほしいと（いう思いも聞く）。外からの目線であるとか、今は新しいところばかりを気にしているので、忘れないでもらいたい。今まで機嫌よく利用していた人たちが行きにくくなったということは絶対に避けたい。子供サービスにボランティアとしても関わらせていただいているので見ていたら、図書館員が出向いてそこで人間関係を作り、その子たちが図書館に来たときに、知っているお兄さんがあそこにいる！という具合に、図書館に対して親しみが湧いてき始めているところである。1年半したら別のところに移ってしまい、5年経ったら新しくなって帰ってくるが、それでも図書館員と利用者の人間関係がずっと続いて行ってくれば、移転した戻りという間も来てくれるかもしれない。そういった関係が切れないように、この7～8年うまくできればと思っている。従来の利用者、要するに図書館の近所の人たちに関しては、今地区館の機能として頑張っているというのを気にしつつ、新しいことをしていただけたらと思う。

委員：暫定的な移設に関して何か決まっていることはあるのか。

事務局：何も決まっていないが、長い間仮移転しなければならないので、今おっしゃったようなことは少し頭が痛い。できれば三宮の、現在に近いところで移転先を当たっているのだが、なかなか広い場所がない。図書館はわりと特殊な施設で、いろいろと制約がある。普通のオフィスの床のようでは入ることができない。消防法や、安全の確保の面からいろいろ検討中しているがまだ決まっていない。

会長：移行期間は7～8年になるだろうか。

事務局：新しくできるのは7年先になる。

委員：幼稚園だった子が中学生になる。

会長：一番しっかり掴んでおかなければならない世代だ。

委員：産業連関分析を見ると、神戸がどの産業が弱いかははっきりしており、それは出版・情報と、金融である。横浜も同じような傾向があり、どうしても隣に大きな町があると、金融は育ちにくい。金融はまあよいが、出版や情報発信のところで弱い。皆さんも普段から実感されているところだと思うが、テレビも少し面白い局が一つあるくらいで、新聞社も神戸新聞とはいいいながら、まるで兵庫新聞のようで、そこはご存じないかもしれないが、兵庫県全体の新聞という色合いが少し強く、神戸市民の購読率はそれほど高くはない。急に神戸にテレビ局が新しくできるとか、出版社ができるとか、そんなことまではここで議論することではないし簡単なこと

ではないが、細々と少しずつでも情報発信を試みている方は、どこの町とも同じように、神戸にもいらっしゃる。そういう方々を作る小冊子等、そういうものももっと充実している場所があればと日頃から思っていた。少しずつでも、市民や小さいマイクロ出版社の情報発信を助けていくような。マイクロ出版社のようなところが少しずつ人気を集めているケースが日本中に見られる。神戸にも実際小さい出版社はある。そういう方々を応援するのは素晴らしいことだ。アメリカには magazine の zine というのを使って、自費出版を貴ぶような文化がある。みんな、zine、zine いうのだが、そういった zine だけが扱われているような本屋がある。今時ネットで配信すればよいと思うかもしれないが、やはり本には本の魅力がある。ジュンク堂書店では、時々応援してフェアをされるなどしている。そういう神戸から芽生える情報発信や出版業の種のようなものを応援する機能がここにあればよいと思う。

事務局：書店と出版界との連携についてはこの1～2年、図書館協議会でテーマにさせていただき、ようやくこの秋に第1回目の連携講演会をすることになった。エピック社という出版社と、ジュンク堂書店、神戸新聞社文化部の方3人で、講演とパネルディスカッションをしてもらうことになっている。こういう試みはどちらかということ中央図書館の方ですべきかと考えているが、便利な場所にある三宮はそういうことと図書館がやっていると周知するには一番良い場所になるので、分け持つことができると思う。まだ始めたばかりなので、種の種、という状態だが。

会長：地元で出版されている小冊子でも、徹底的に集めて、保存するのは中央図書館だとしても、三宮でもいくつか展示して目に見えるようになっていだけでも良いのではないか。地域資料を集められるのは良いことだ。

委員：三宮図書館は狭いので仕方がないが、地区館の中で最も掲示スペースが小さいのではないか。一番発信力のあるところが、今一番発信力がないことになっている。郷土資料や観光資料もそうだが、今後はどういう風に見せるかという見せ方も重要だと思う。設計の先生も素晴らしい方とのことなので、上手くして下さるのだろう。

（図書館は）資料はずいぶんお持ちだと思うのであとはそれをどう見せるかだろう。中央図書館でも最近頻繁に展示を変えてくださっている。私たちのように月に何回か来るものは、テーマが変わっているとやはりそれも楽しみの一つとなる。他所から来た方が見てすぐわかることも大事だが、リピーターが新鮮味を感じることも大切だ。大変だと思うが新鮮ということも意識してもらいたい。

会長：ご意見はだいたい話してもらえただろうか。次に、検討会を受けて作っていただいている、新三宮図書館のコンセプト・基本方針（案）について、事務局から説明をお願いします。

事務局：先に会長から説明があったが、検討会のまとめを含めた形での（仮称）新三宮図書館の基本計画案をまもなく神戸市として皆様にお見せし、パブリックコメントをいただきたいと思っている。その中の一部、核となる部分が、今お見せしている資料5「（仮称）新三宮図書館のコンセプト・基本方針」である。ここに至るまでには

この検討会もあり、いくつかネットアンケートや利用者アンケートも取った。それらの結果を受け、今後三宮図書館の再整備の中で考えなくてはならないのは次の点と考えた。現在狭くて座るところもないといわれているような読書環境の向上ということと、この検討会でも話題になった近づきやすさ使いやすさということ、三宮の玄関口にあることでいろんなところとつなぐ機能ということ、同じく玄関口にあることから顔的な役割もある程度求められるということ。これらを整備の課題として位置づけ、書いたものである。

(資料5に基づき説明)

コンセプト「地と情報の美しいエントランス」だが、新しい三宮図書館が入り口であることにはこの検討会でもご同意いただける場所だと思う。それを“エントランス”という言葉で表現したが、動きがないということで、評判がよくない。入り口であるというコンセプトはそのままに、何かいい案があればと思う。

委員：資料5と資料3、4とはどういう関係になるのか。

事務局：資料3と4は、今まで検討してきたことのまとめである。検討会での言葉を羅列したものになっている。そこから神戸市として取捨選択し、こちらの考えるコンセプト・基本方針の中にエッセンスとして入れ込むもの、実現方法として入れ込めるものを取り入れてまとめたものが資料5のコンセプト・基本方針である。一致するものではなく、多分にずれるところがある。

委員：資料5の、文書の責任者は検討会ではなく神戸市ということか。

事務局：そうだ。

今日話していただいた災害対応などは入っていない。

委員：今日いくつか議論があったことは、これにまた加えるということか。

事務局：加える。

委員：今日の議論のこれが入っていないということは言う必要がないということになるか。もちろん入っていないので。

会長：言っていた方が書き込みやすくなる。どこに入れるか言っておいた方がいいだろう。

委員：入れるとしたら、安心・安全ということだろうか。安心・安全のための情報発信ということになるか。

“エントランス”が静の感じだというなら、たとえば“コンシェルジュ”という言葉ではどうだろうか。あまり横文字を使うのではなく、本当はもっと日本語でと思うが。

会長：日本語でわかりやすく、しかし“入り口”というのも少し…。

委員：日本語で、人が集まって何かを見つけられるというようなイメージの言葉があればよいが。

会長：もう少しワクワク感や期待感があればと思う。“美しいエントランス”は少し硬いように思う。

委員：もう少し入りやすい感じか。

会長：その方がよいと思う。

委員：ありきたりだが“ひろば”のような感じだろうか。

会長：人が集まったり、何かやったりすることの昔の神戸の方言というか、皆さんが使われていた、今は使われなくなったような言葉はないか。

委員：最初に出てくるキャッチフレーズは大切だ。“たまり場”ではどうか。

委員：“美しいたまり場”…。

委員：“美しい”は取らなければならない。

事務局：“広場”は他のところで使おうとしている。

委員：要するにもう少し下町っぽい、ごちゃごちゃとしたイメージのある言葉が…（よいのだろう）。前々回に事例で出ていた岡山の図書館のキャッチフレーズはよかった。

会長：“もみわ広場”か。

委員：何かいい言葉があればいいのだが。

会長：“美しい”を入れるとごちゃごちゃ感が出せない。どちらを優先されるかだ。

事務局：基本方針の方で“美しい”と言っているので、“美しい”はなくてもよいかもしれない。

委員：きれいだが、きれいな方がよいのか。

会長：入りやすさ、という皆さんの議論もあった。今の住民の方が違うというのではないが、もっと入りやすい雰囲気の方がよいのではないか。

委員：近い感じか。

会長：“美しい”と入れると、急に敷居が高くなる感じがする。実際は基本方針の最初のところで“美しく”と書かれているので良いと思うが、“美しい”を入れるから少し硬く感じるのだろう。

委員：キャッチコピーはここで決まってしまうのか。

会長：我々は意見を言うだけで、最終的にはもう少し考えてもらえばよいだろう。

事務局：たとえば、新三宮図書館のネーミングライツではないが、そういうもので何か、素晴らしい言葉が出れば、そういう言い方になっていくかもしれない。

委員：今決めてしまわなければならないものではない、と。

会長：そうだ。「基本方針と機能」に（１）～（６）まである中で、まだ入っていない災害対応や、地域の情報をしっかり集めるということも非常に大切だと思うので、（３）のあたりに追記していただければと思う。（６）のバスターミナルの箇所で、利用者の動線については十分検討していくと書いてあるが、待合の時の本との接し方や、本の返却の仕方、そういったことでのバスターミナルとの連携を、それが立地の特性でもあるので、私としてはもう少し書いてもよいのではという気がした。できるできないは別として、そういうことを考えていくというのは、前回せっかく意見が盛り上がったところでもあるので…。本当はバスの中に返却ボックスがある方がいいと思っているが、そこまでは無理としてももう少し書いていただきたい。

委員：細かいことだが、11 ページの「多様な資料の充実」の箇所、下から2行目に“母国語の”資料とあるが、このごろは“母国語”という言葉はあまり使わない。国イコール言葉ではないということにこだわっていて、“母語”とした方が、今の時代の言葉に（合う）。なぜ母なのかという話もあるが。母国とも言うようにどうしても母親の方になる。

会長：少し戻るが、資料4はとてもよくまとめていただいているという印象である。今日また新しい話が出たが、大変よくまとめていただいている。資料4の内容が5に移っていればよいのではと思ったときに、抜けていることはないか。

事務局：チャレンジングか。

会長：チャレンジングが、今抜けている。付加価値や多様な閲覧席というのはどこかに書いてあるか。一番最初か。これはそのままホームページに載るのか。

事務局：その予定である。

会長：もう少し色は何とかならないか。赤と緑は補色関係であり、十二色相環でも反対にある敵対しあう色だ。目立つのだが少し目立ちすぎる。せっかく美しいエントランスと言われているので、もう少し検討してもらいたい。構成はとてもよくまとめられているので良い。

委員：一点よいか。13 ページの5番で見出しが「文化ホールやバスターミナルに近い環境を生かし…云々」とあり、その下に書いてある言葉を見ると、「施設間の連携で、ホールの催しに関する展示や、神戸からバスで出かける方をターゲットに、行先関連の資料を展示するなど」と書いておられる。が、せっかく事業協力者の資料にも、もう少し踏み込んだことが書いてあるので、バスターミナルの方に図書館としても露出するというのを、もう少し書いてもいいのではと思う。この検討会でもこのあたりの議論は多かった。

委員：昨日付でこれが出たので、ビジネス支援やホテルラウンジ等もこの関係性の中に入れてみることも可能ではないか。

事務局：可能ではある。ただしビジネス支援は入ると思うが、ホテルラウンジはあまり議論になっていなかったもので、どうするかは考えどころだ。

委員：同じ階にせっかくあるので、と思うが。

委員：もう一点よいか。同じく13 ページの上の方に、「司書のガイドにより、中央図書館の100万冊の資料につなぎ、さらには博物館、文書館、専門機関、大学等…」とある。少しわからないので教えてもらいたいのだが、文書館とは何か。

事務局：昔の南蛮美術館跡地にあるものだ。

委員：では神戸市のものか。大学とつなぐというのは具体的にどういうことがあるか。

事務局：主には大学の持っている資料につなぐということになる。

委員：そういうことができるのか。

事務局：最近では古文書を読むということで、神戸大学の方が、まちづくり会館を拠点に、図書館が持っている神戸村文書という神戸が兵庫の港だったころから伝わる文書が

あるのだが、それを市民向けに解説する講座を行われている。そういう風にいろいろつながることができる。

委員：これとは関係ないが、もう一点だけ。阪急三宮に大学との連携スペースが予定されているが、

事務局：サンパルの中か？

委員：阪急の方だ。阪急が新しいビルの中に、同様にコワーキングスペースを作ろうとされており、そこに神戸市の大学連携推進の課が入るような話があったと記憶している。大学もやはり都心に集まる場所が必要であると思うが、そこが大学生を集めるのであれば、ここにはあまり書かなくてもよいかと思っていた。ライブラリー機能のようなものを持つとしている可能性はあるので、同じ神戸市のことなので、何をしようとしているかは聞いておいた方がよいだろう。

委員：交通センタービルも大学は使っている。

事務局：話はまた確認しておく。おそらくだが、阪急の話はなくなったように聞いている。スペースが別のところになるようなことだった。

委員：少し批判めいて聞こえるかもしれないが、兵庫県は大学がたくさんある。神戸にも多い。しかし皆（大阪の）ナレッジキャピタルにブースを持っているなど、神戸の都心に、せっかくの大学集積のメリットを感じられるところがない。大学の先生方もおそらく三宮あたりに使えるスペースがあれば、街中で講義をするときに使いたい人もいるだろうに、そういうものがない。

委員：交通センタービルはいくつか使っていた。

委員：京都だと、大学コンソーシアム京都というのがあり、駅前にビルまで持っている。

事務局：神戸市でも考えているが、場所が少し変わるという話だ。

委員：どこかには作られるということか。了解した。

会長：資料5ではなく資料3や4の追加になるかもしれないが、マイクロライブラリーの活動を地域で行われている人たちとの連携というのはどうなのか。図書館としては本は備品であり、紛失することを非常に嫌われる。それを自由に貸し出すことには非常に抵抗があると思う。本というものでつなぐことが今回の大きなキーワードであるならば、本で人と人をつないでいけばよいのではないか。図書館でマイクロライブラリーをやらなくてよいが、そういった活動をしている人たちとも、ハブというか、つなぐというか、ある時期はたとえば本祭りのようなイベントを一緒にされてもよいだろう。そういったことをもっと積極的にされたらよいのではないか。なかなか、図書館だけが頑張ってもだめだ。最初に村上委員が言われた、学校図書館もそうだ。学校図書館との連携は今回そこまで言っていないが、子供たちが本に接するには一番近いところは学校である。家庭もあるが学校もある。学校との連携やマイクロライブラリーのようなミニ私設図書館とのつながりも大事ではないかと思う。資料5の基本方針のところに書けなくても、検討としては出てきたということは書いておいていただいてもよいかと思う。

事務局：学校司書、図書館への支援は中央図書館の機能として現在行っている。マイクロライブラリーというか、コミュニティライブラリーや市民図書室への支援も中央で行っている。

事務局：地域図書館のうち一館が、まちライブラリーフェスタに今年から参加しており、萌芽はある。

委員：岐阜のメディアコスモスでは、そこ自体がまちライブラリーのコーナーを持っている。私自身もまちライブラリーの人に教えてもらって東遊園地の取り組みをやっている。確かに神戸で行っている人はいるが、その人たちが拠点と感じている場所がない。ご存知と思うが、古本屋などは自分のスタイルを持ち、ミニイベントもたくさん行い、小さなコミュニティを作っている。そういう方々はたぶん、中央図書館や三宮図書館に関わってもらったらうれしいと思う。公のところに目を向けてもらっていると。

会長：掲示板ひとつでもいいので、チラシ等を貼っておくなど、みんなが活動できるスペースがあればよいと思う。三宮は玄関口なので、頑張っってそういうものもつないでいただきたいと思う。

時間が来てしまったが、どうしてもこれだけということはあれば、よいだろうか。では、協議としてはこれで終了する。検討会のまとめについては、今日の内容を踏まえて事務局に加筆修正していただく部分があるが、最終的な内容の確認と了承については、今日が最後ということもあるので、会長に一任いただきたい。責任を持ってまとめる。

## 5 閉会

事務局：これをもとに中央図書館で整備基本計画をまとめ、パブリックコメントにかけることになる。7年先になるが、新しい三宮図書館ができた時にはぜひ来館いただきご意見などもいただけたらと思う。

### 《配付資料》

- (資料1) 検討会委員名簿
- (資料2) 検討会開催要綱
- (資料3) 第2回検討会キーワード整理（事前送付）
- (資料4) 検討会のまとめ(案)
- (資料5) コンセプト・基本方針（案）

### 《参考資料》

雲井通5丁目地区再整備にかかる事業協力者の優先交渉権及び次点交渉権者の決定について